

関連学会印象記

第47回日本胸部外科学会総会印象記

北村昌也

第47回日本胸部外科学会総会は、千葉大学医学部教授 山口 豊会長のもとで1994年10月25～27日に千葉市にて開催された。応募演題1167題のうち700題(59.4%)が採択され、心臓大血管系、肺縦隔系、食道系の胸部外科3本柱の採択率がいずれも約60%であり、バランスのとれた学会であった。

特別企画のうち招請講演では、van Mourik 先生(オランダ)がオランダを中心とする西ヨーロッパにおける肺癌の外科治療成績を、de Vivie 先生(ドイツ)が青年期および成人における先天性心疾患の外科治療成績を、Cosseli 先生(アメリカ)が胸部大動脈疾患に対する最近の外科治療成績を示され、実際の臨床をすすめる上で非常に参考になった。会長講演では山口 豊教授の長年の臨床経験に基づいた「求めて歩きし道—呼吸器外科における機能温存と再建への道—」と題された講演を拝聴し、一つの道を究める尊さを感じ入った。

シンポジウムのうち「本邦における心・肺移植」では、諸外国における心・肺移植の臨床を含めて現時点での問題点とそれに対する基礎的および臨床的研究の実際について討論され、近い将来再開されるわが国の心・肺移植の臨床に大変参考になったと思われる。「冠状動脈バイパス手術の遠隔成績」では、わが国の代表的な施設の10年以上の長期遠隔成績が示され、動脈グラフト使用の優位性等が討論された。

ビデオシンポジウムのうち「弁形成術」では、特に各種僧帽弁逆流に対する様々な弁形成手技がビデオで示され、非常に参考になった。今後さらに多くの施設の経験から、各弁形成手技の術後遠隔期成績について次第に明らかとなることが期待

される。

ビデオセッションでは、「冠血行再建を伴う胸部大動脈瘤の手術」で様々な症例が呈示され、その冠血行再建には各種手術手技の組み合わせが有用であった。「左室瘤切除術」では、左室瘤や心室中隔穿孔などに対して比較的大きなパッチを用いた各種修復法が示され、良好な結果が報告されていた。

一般演題(口演)では、「先天性心疾患」のセッションで各種手術後の遠隔成績や成長の問題などが取り上げられていた。「弁膜症」のセッションでは、高齢者、各種代用弁の遠隔成績、再手術、新しい手術手技などが様々な角度から討論されていた。「大血管」のセッションでは、脳保護や各種脳灌流法、弓部大動脈瘤や解離性大動脈瘤などの手術成績、各種人工血管の特徴などが報告された。「冠状動脈」のセッションでは、各種術式の遠隔成績、動脈グラフトの様々な使用法とその効果などが呈示された。

示説では、広く胸部外科全般にわたる問題が取り上げられ、口演にもまして活発な討論が繰り返されていた。

以上、著者の専門の心臓大血管系を中心に第47回日本胸部外科学会総会の印象および発表内容の概略を述べた。上記以外に肺縦隔系および食道系においてはさらなる進歩の結果が数多く報告されていた。まさに胸部外科3本柱の基幹学会として絶大な成果を上げたと思われる。

1995年度の第48回日本胸部外科学会総会は東京大学医学部胸部外科教授 古瀬 彰会長のもとで10月3～5日に東京で開催される予定である。